

歿死おうしとは、横死とも表記され、事故・殺害・災禍など思いがけない災難で死亡することを意味する。本発表で取り上げる『関東震災歿死者名簿』には、関東大震災による歿死者約10万5,000人のうち、過半数に相当する約5万4,700人分の氏名が記載され、同名簿は淡路焼タイルと和紙という異なる二種類の素材で作成された、と記録は伝える。

同名簿は高野山奥之院に所在する関東震災霊牌堂に奉納され、同霊牌堂で一万年間保存されることになっている(以下、一万年保存計画)。同名簿の所蔵と管理は、高野山真言宗総本山金剛峯寺(和歌山県伊都郡高野町)が行う。

関東震災霊牌堂が所在する敷地内には、誰でも自由に立ち入ることが可能で、「高野山震災霊牌堂建立願文」と題された案内板があり、案内板には名簿の作成の動機から名簿の奉納に至る一万年保存計画の概要が記載されている。また、先行研究にも見られるように、『関東震災歿死者名簿』の存在それ自体は既に知られていたものの、名簿の奉納から80年以上にわたり名簿の現物の学術的な調査がなされることはなかった。

発表者は、金剛峯寺の協力の下、2013(平成25)年の夏にタイル製の『関東震災歿死者名簿』を調査する機会を得た。本発表では、タイル製『関東震災歿死者名簿』の調査結果を報告するとともに、資料に記述された内容をもとに和紙製名簿の形態や、和紙製名簿を保存するための特殊な容器である保存筒にも言及し、一万年間保存計画の概要を紹介する。

一万年保存計画の立案者は、関東大震災発生時の東京市長・永田秀次郎ひでじろうで、二度にわたり東京市長を務めた経験を持つ。永田が東京市長に在任中の1923(大正12)年9月1日に関東大震災が発生、震源から近い帝都東京は壊滅的な被害を受け、街中の死体が累々と横たわった。残暑厳しい9月では死体の腐敗が早く、永田は東京市長として、法要を営まず歿死者の身元不明のまま死体を焼却せよ、命令せざるを得なかった。この苦渋の決断が動機となり、永田は身元不明の歿死者の氏名を調べ、判明した氏名を名簿に記すことを決意。永田は作成した名簿を高野山の関東震災霊牌堂に奉納し一万年間保存することで歿死者への慰霊としたいと考えた。名簿作成のヒントは、永田が高野山で目にした観音銅像。その銅像には、江戸時代の明和の大火による歿死者の戒名や氏名が刻み込まれていたという。計画の遂行には、永田の私財が投じられ、東京市長としてではなく、一個人として一万年保存計画に邁進した。1930(昭和5)年、京都帝国大学建築学科教授武田五一による設計の関東震災霊牌堂が完成、同年11月9日に名簿は霊牌堂に奉納された。

発表者が調査したタイルは、約400枚と推計されるタイル製名簿のうち、サンプルとして選び出した約30枚である。名簿に使用されたタイルは永田の故郷である淡路島のタイルメーカーが提供、B5サイズ大の大きさで、その両面が使用され、表裏にそれぞれ約75名、両面で約150名の名前を記載。タイルの中には、外国人の名前をアルファベットで記したのものや、1名につき1枚を使用した皇族用の名簿、永田自身が筆を執り名簿の作成の由来を記した「関東震災歿死者名簿埋蔵由来記」もあった。

一方、和紙製名簿に用いられたのは、内閣印刷局が紙幣の印刷に使用する局紙。氏名が記された名簿は丸められ、特殊な三重構造の保存筒に密封された。保存筒は破損を避けるため慎重に高野山へ運び込まれ、霊牌堂内に安置された堅牢な石棺の中へ封入された。

今回の調査で『関東震災歿死者名簿』の一万年保存計画の概要はおおよそ判明したものの、総経費、歿死者の氏名の調査の経緯や詳細など不明な点も多く、またタイルの悉皆調査も終えていない。これらの点に関しては今後の課題とし、今後も調査を行いたいと考える。